

# 街並み生い立ち 街歩き

— 港町横浜と佐世保

都市デザイナー

西脇 敏夫

〈横浜編〉

## 「街並み生い立ち 街歩き」 執筆テーマ

- ① 街並みの生い立ちを歩く  
〈横浜編〉
  - ② 大通り公園
  - ③ 都心プロムナード
  - ④ くすのき広場と横浜市庁舎
  - ⑤ 横浜公園と日本大通り
  - ⑥ 日本大通りの建物たち
  - ⑦ 開港広場
  - ⑧ 山下公園通り
  - ⑨ 横浜人形の家
  - ⑩ 馬車道、元町、  
伊勢佐木町、中華街
  - ⑪ 港の見える丘公園周辺
  - ⑫ 外人墓地、元町公園周辺
  - ⑬ 山手公園、イタリア山庭園周辺
  - ⑭ 歴史を生かしたまちづくり  
〈佐世保編〉
  - ⑮ 佐世保の街づくり
  - ⑯ コンパクトシティ佐世保
  - ⑰ 三ヶ町四ヶ町商店街
  - ⑱ 心やさしい海辺のまち
- (テーマは予定です。変更となる場合もあります)

## 8. 山下公園通り

### 山下公園通りの街並み

「シルクセンター」の脇から、「山下公園通り」が始まります。大きな銀杏並木のある通りに面してホテルやホールなどが建ち並び、港町横浜の顔としての街並みです(写真1)。



写真1 山下公園前の街並み

関東大震災までのこの通りは、直接、港に面した通称「バンド」と呼ばれた「海岸通り」でしたが、関東大震災後に「山下公園」が造られ、現在は「山下公園通り」と呼ばれています。

戦災で焼け野原となった一帯は「山下公園」が接収されていた影響もあり、1970(昭和45)年頃までは「シルクセンター」や「マリンタワー」以外には目立った建築活動は見られませんでした。

そこで「神奈川県民ホール」と「産業貿易センター」の建設をきっかけに、横浜市は「山下公園」に面する街区を、横浜の顔となる風格のある街並みが形成されるように背後の「本町通り」までの街区を含め、街づくりの取組みを始めました。

街区一帯の建物の用途や車のアクセスにかかわる事項を整理し、特に「山下公園通り」に直接面する街区については、銀杏並木を守り快適な歩行者空間を形成するため、3mの壁面後退、広場の確保、山下公園への日照確保、駐車場とその出入口の位置、建物のデザインや色彩、広告物など、街並み形成の考え方を「山

下公園周辺地区の整備指針」として整理しました(図1)。



図1 整備指針図

そして、この指針に沿って街並みが形成されるよう具体的な擦り合わせを行うため、一棟一棟の建築計画に際し設計者などとの話し合いの場を持つようにしました。

「山下公園通り」の現在の街並みは、横浜市と沿道の建築関係者がこうした話し合いを行うことによって、時間をかけて形成されてきました。例えば、大きく枝を伸ばした銀杏並木の下の現在の幅広い歩道は、車道側は道路ですが、建物側の3mの部分は壁面後退した建築の敷地です。当初はでこぼこもあるコンクリートの平板ブロック敷きでしたが、通り沿いの建築物が概ね建ち揃った時に沿道の建物所有者と協力して御影石張りに貼り換えました。それでは、主な建物について一つ一つその生い立ちを辿りながら歩いてみたいと思います。

### シルクセンター

シルクは横浜の発展にとって、歴史的に産業や文化面で深い関わりがあります。「シルクセンター」の建物は、神奈川県が中心となり国、横浜市、関係業界が協力をして、生糸と絹製品貿易や観光の振興を目的に1959(昭和34)年、横浜開港100周年を記念して建てられました。

ここは開港当初、「英一番館」と呼

ばれたイギリスの貿易会社「ジャーディン・マセソン商会」のオフィスがあった場所です(写真2)。

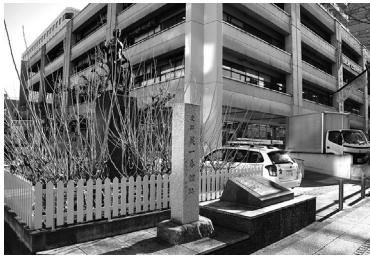


写真2 シルクセンター前の桑の木と英一番館跡の碑

コンクリート打ち放し仕上の建物の低層階には「シルク博物館」があります。高層階には横浜港を代表する「シルクホテル」というホテルがありましたが、消防法の改正によりホテルとしての営業が出来なくなり、現在はSOHO事業者や小スペース事務所などが入る「横浜シルクセンターSOHO」として使用されています。

## 産業貿易センター、神奈川県民ホール、ホテルモントレ横浜 (図2)



図2 通り沿いに連続する広場

シルクセンターの脇を抜けると、レンガタイルが敷き詰められた広い空間が開けます。手前の「産業貿易センター」と隣の「神奈川県民ホール」の前に、二つの広場が向き合ったかたちで設けられています(写真3)。

「産業貿易センター」は、神奈川県、横浜市、横浜商工会議所が協力して建設したオフィスを中心にした複合



写真3 産業貿易センターと県民ホール前の広場

商業ビルです。「神奈川県民ホール」は約2,500席の大ホールや小ホール、展示場を備えた県立の施設です。

二つの施設はほぼ同時期に計画され、共に1975(昭和50)年にオープンしていますが、整備指針に沿って最初に取り組まれた建物で、山下公園周辺地区の街並み形成のモデルになりました。横浜市が二つの建物の事業者と設計者と話し合いをし、広場の位置や色彩、高さなどを調整してこの街並み空間が誕生しています。それぞれが自分の都合だけでなく、お互いに協力して山下公園や銀杏並木の緑の空間と背後の街とのつながりに配慮した建て方をしています。

そして「県民ホール」のもう一方の隣に「ホテルモントレ横浜」(写真4)も1973(昭和48)年に「日航ホテル」として計画が始まっていましたが、外部空間のデザインが相互に調整されて建設されました。このホテルはその後「ザ・ホテル・ヨコハマ」、「ザ・ヨコハマ・ノホテル」と名前を変え、今日に至っています。



写真4 ホテルモントレ横浜

## 戸田平和祈念館(旧「バターフィールド&スワイヤ商会」)

このホテルの隣には赤レンガ造の2階建ての歴史的建物が保存活用されています。この建物は1922(大正11)年に建てられた「英七番館」と呼ばれていた「バターフィールド&スワイヤ商会」の一部です(写真5)。



写真5 旧英七番館

この敷地に高層の「神奈川センター」の計画が始まりましたが、建て主の好意的対応により、敷地内にあったこの建物の道路側三分の一が保存され、周囲に広場を設け「戸田平和記念館」として1979(昭和54)年より利用されているものです。

## ホテルニューグランド

「ホテルニューグランド」は、重厚な本館に連なって高層棟も建っています。横浜を代表するこのホテルの本館は、貴重な歴史的建造物として「山下公園通り」の街並みには欠かせない品格のある建物です(写真6)。マッカーサーやチャップリン、バーブルースなどが宿泊したことでも知られています。



写真6 ホテルニューグランド

コラム

## 山下公園の生い立ち

「みなとみらい21地区」に「臨港パーク」が出来るまでは、市民が自由に直接出える横浜の港は「山下公園」だけでした(写真a)。港を訪ねて、市内外から年間400万人もの人がここを訪れていました。

「山下公園」のある場所は関東大震災までは海でした。そして、現在「山下公園」の中央にある沈床花壇のところには、横浜開港後の1864(元治元)年に波止場が造られていました(写真b)。付近一帯の現在の「山下町」地区は外国人居留



写真a 山下公園

地でしたが、この波止場は仏国海軍物置所の前にあったことから「フランス波止場」と呼ばれていました。

しかし関東大震災の後、この海が瓦礫の集積所に指定され、埋め立て後を海岸公園とすることが計画されました。そして1925(大正14)年に着工、1930(昭和5)年に「山下公園」が開園しています。

1935(昭和10)年には「復興記念



写真b 沈床花壇

横浜大博覧会」が開催されていますが、第二次大戦後は米軍に接收され、将校用の住宅地になっていました。

1959(昭和34)年に全面的に接收解除になり、1961(昭和36)年に再整備が終了し、公園前に「氷川丸」が係留されました(写真c)。

「氷川丸」は1930(昭和5)年に横浜で生まれ、外国航路で活躍しましたが、1953(昭和28)年には

関東大震災後の横浜市復興計画の一環として官民一体となって建設され、1927(昭和2)年に開業しました。設計は東京上野の「国立博物館」や日比谷の「第一生命館」、銀座の「和光」などを手がけた渡辺仁です。開業時にダイニングルームや舞踏室として使われた華麗な空間は、現在も宴会場として使われています。

1991(平成3)年に、駐車場として使われていた隣の土地に18階建ての「ニューグランドタワー」を開業しましたが、その際に本館が保存されることになりました。サービスヤ-



写真7 本館中庭

ドとして使用されていた中庭も「公開空地」としてきれいに整備されました(写真7)。

### マリントワー

1959(昭和34)年の開港100周年記念行事がきっかけとなって計画が生まれ、横浜港を象徴するモニュメントとして1961(昭和36)年に建設されました。

高さは106mで世界一高い灯台としてギネスブックにも記録されましたが、2008(平成7)年に灯台の機能は無くなっています。

航空法により赤白の縞模様に塗り分けられていましたが、横浜市制100周年、開港130周年を記念して開催された横浜博覧会を迎え、横浜港を象徴するモニュメントに相応しいかたちという横浜市の要望を受けて、1988(昭和63)年にお色直しをしました。色彩を下部の白色から

上部にかけ赤色に変化するグラデュエーションに変え、それまでの広告塔の役割も廃止し、夜間のライトアップを実施しました。このことによって減少していた入場者数が大幅に増加しましたが、その後は集客力が徐々に減少していき、2006(平成18)年に「マリントワー」は横浜市に、同じ経営下にあった「氷川丸」は日本郵船に譲渡されています。横浜市は改修して事業者を公募し、外観と屋内のリニューアルが行われ2009(平成21)年に現在の姿になっています(写真8)。

1961～1968 1968～2009 2009～



写真8 マリントワー





写真c 氷川丸

定期貨客船としてシアトル航路に復帰しました。1960(昭和35)年には運航を終了し、公園前に係留されてからはユースホテルとして利用された時もありましたが、現在は公開されて「山下公園」の風景の一部になっています。

一方、山下ふ頭の建設に伴い、1965(昭和40)年には公園の道路際に沿って「山下臨港鉄道」が高架橋構造で建設されました(写真d)。



写真d 道路沿い的高架橋

その後1986(昭和61)年に鉄道線は廃止されましたが、高架橋は公園内に残されていました。1989(昭和64)年の横浜博覧会の際に自動車も走ったこともあります。しかし公園の西端から新港地区までは、「山下臨港線ブルムナード」として2002(平成14)年より利用されています。

一方、公園の東側の地上にあつ



写真e 世界の広場

た線路敷きは1988(昭和63)年に撤去され、地下に下水ポンプ場、地上に公共駐車場、そしてその屋上に公園が造られました(写真e)。「世界の広場」と名付けられ、「人形の家」からの歩道橋が接続され、「山手地区」の「フランス山」に直接つながるようになりました。

## メルパルク横浜

1980(昭和55)年に「横浜郵便貯金会館」としてオープンしています(写真9)。



写真9 メルパルク横浜

それまで「山下公園通り」のこの付近までは、人通りが多くはありませんでした。「山手地区」への歩行者ルートも分かり難い状態にありました。

「山下公園」には道路に沿って「山下臨港鉄道」の高架橋がありました。この付近では線路が地上に下りていて公園には直接出入りが出来

ず、あまり人が行かない森のようになっていました。

この建物が出来たことによって、通りに人通りが増えるようになりましたが、更にこの周辺に賑わいが出てくるようになったのは、次回で紹介する「横浜人形の家」と「フランス橋」「ポーリン橋」が誕生してからのことになります(写真10)。これらの施設は、もともとお互いに関係がなく別々に進んでいた建物と歩道橋の事業を、街づくりの観点から合体さ



写真10 中央に「人形の家」その手前が「メルパルク横浜」、左手に「ポーリン橋」と「山下公園世界の広場」、右手に「フランス橋」と「フランス山」の緑。

せ、二つの公園と街をつなぐことになった珍しい事例です。その誕生秘話を次号で詳しく述べます。

## にしわき・としお

早稲田大学・同大学院建築学科で学んだ後、大高建築設計事務所、武建築計画研究所で多摩NT計画、港北NT計画、再開発計画、観光開発計画、建築設計などに携わった。

36歳の時(1976年)、横浜役所にアーバンデザイン担当主査として招聘される。都市デザイン室長、都市企画部長、都心部整備部長などを歴任し、「関内地区」「山手地区」「横浜駅周辺地区」「みなとみらい21地区」「金沢シーサイドタウン地区」「港北ニュータウン地区」「市民まちづくり」「歴史を生かしたまちづくり」「水と緑のまちづくり」「ライトアップなど都市空間演出」「デザイン都市横浜に向けた活動」等々、22年半に亘り横浜市の街づくりに携わり、都市デザインの具体的な実践活動を展開した。

59歳の時(1999年)、佐世保市役所に佐世保市理事(都市デザイン担当)として招聘され、7年間、海と緑に抱かれた心優しい街の都市デザインに取り組む。

首都圏と地方との二つの自治体、コンサルタント、事業者など、異なる立場から都市や建築に関わり、都市デザインを実践してきた。様々な公的委員や大学非常勤講師を歴任。講演、論文、著書、活動成果に対する受賞などがある。